巻頭言

専門(用)語研究の新たな展開のために

石井　正彦
特集「専門用語」編集担当
大阪大学大学院文学研究科

(1) 専門(用)語が、その名の示すとおり、(一般にはない) 専門のことば、(一般人の使わない) 専門家のことばであるとすれば、専門(用)語の (改善のための) 研究が、専門家の手によって、専門家自身のために行われることは、ごく自然なことである。個別の専門分野内で、また、異なる専門分野間で、用語を体系化し、標準化することなどは、(ターミノロジストの関与はあるとしても) それぞれの分野に精通した専門家にのみなし得ることであり、また、その恩恵 (知識の整理、専門家間のコミュニケーションの円滑化など) を直接にこうむるのも専門家自身である。専門(用)語研究が、言語学としてのそれを別にすれば、その基本において、専門家の、専門家による、専門家のための研究であるということは、まず、認めておく必要がある。

(2) いわゆる「世界化」がさまざまな分野で進行する中、専門のことがらを「世界語」としての英語で語ることは、とりわけ科学・技術の分野では、あたりまえのことになっている。1970年代末の時点で、世界各国の科学技術論文の過半数は英語で書かれているという報告があるし[1]、90年代末には科学・技術系の日本人研究者の4割近くが「はじめに (日本語ではなく) 英語で論文を書き上げる」と答えている[2]。日本植物学会の機関誌『植物学雑誌』のように、40年代後半には英語の論文が全体の4分の1程度であったのに、72年からは誌名も "The Botanical Magazine, Tokyo" と変えて、100%英文の雑誌になったという例もある[3]。

(3) このような状況の中、もし、専門(用)語とその研究が専門家のためだけにあるというならば、「日本語の専門(用)語」研究の意義はきわめて小さいものにならざるを得ないだろう。なぜなら、専門家にとっては、その活動が世界的なものであればあるほど、専門のことがらを国際共通語としての英語で語り、英語の専門(用)語を用いることの方が好都合だからである。「世界化」の進行の前で、専門(用)語研究を専門家のためだけに限定することは、科学・技術の分野ではとくに、「個別言語の専門(用)語」研究の根拠を失わせ、「英語の専門(用)語」研究に一元化されることを意味する。

(4) すべての専門家がかつてそうであったように、専門家をこころざし、その専門分野の知識や技術を学ぶのは、非専門家たる一般人である。一般人のことばは、当然、個別言語としての自国語であるから、自国語で専門の勉強ができるということは、専門家の養成と、それを通しての専門分野の拡大・発展にとって、きわめて有利なことである (「英語第二公用語論」のように、一般人も世界語としての英語を話せばよいという考え方については、今は考慮の外におく)。日本の近代化は、西洋先進国からもたらされた専門用語の多くを日本語に翻訳し、それによって、専門的なことがらを自国語で理解し、伝達することができるようになったことと無縁ではない。

(5) 専門(用)語を一般人とのかかわりにおいてとらえることは、近代化達成以後の現代においても、重要な意味をもっている。なぜなら、社会が進歩・発展・複雑化すればするほど、日常生活の中にさまざまな専門分野の事物・概念が入り込み、それらを表す専門用語が否応なく一般人に突きつけられるからである。今、手元にある携帯電話の説明書を見れば、「各部の名称」として、次のような用語があげられている。

アンテナ、着信ランプ、スピーカー、ディスプレイ、文字キー、マルチファンクションキー、メモキー、数字キー、マイク、ハンドストラップ取り付け箇所、イ

ヤホンマイク端子、背面スピーカー、バッテリーカバー、外部接続端子、……

現代社会では、すべての分野に通ずる専門家などというものは存在せず、誰もが、何らかの、そして、きわめて多くの専門分野について素人であって、身の回りに押し寄せる専門用語の群れをどの程度理解できるかは、切実な問題になっている[4]。

(6) 「日本語の専門(用)語」研究は、専門(用)語を専門家だけのものと考えずに、一般人（非専門家）のものでもある、あるいは、専門家と一般人とのインターフェイスでもあると考えるところから、大きく発展していく可能性がある。

一方に一般人のことば（一般語・日常語）を考慮する必要が生じれば、専門(用)語と一般語との違いを通して、専門(用)語とは何かという原理的な問題への関心が高まることが考えられる。また、専門(用)語がかかえるさまざまな問題の解決に、一般語の「知恵」を借りることもできる。電子レンジで調理することを「チンする」と表現したのは一般人であった[5]。

専門(用)語研究を、用語（語彙）レベルに限定する必要もなくなる。一般人とのかかわりを重視すれば、専門家が書き、語ることばの全体が問題となる。外国語教育の分野では、専門的知識を学ぶ外国人のために、「専門言語」（英語の Languages for Special/Specific Purposes(LSP)やドイツ語の Fachsprache など）という概念を早くから設定し、音声・音韻、文字・表記、語彙、語形成、文法、文章・談話、位相、言語行動などにおける諸特徴が総合的に記述されている[6][7][8]。

専門(用)語研究の担い手についても、各分野の専門家やターミノロジストだけではなく、一般語を対象とする日本語学者・言語学者はもちろん、日本語教育・国語教育学者、言語心理学者などとの提携によって、新たな視点からの研究が期待される。

専門家自身も自らの研究成果や専門的なことがらを一般人にわかりやすく説明したいと願っている、との調査結果もある[2]。その具体的な方策を提供していくことも、これからの専門(用)語研究の課題であろう。

(7) 本特集に収めた５編の論文は、いずれも、今後の専門（用）語研究が新たな展開の可能性を有することを示す好論文である。影浦峡氏の論文は、専門（用）語研究とは何かを原理的に追究したもので、専門（用）語研究の原論ともいえるものである。塩田雄大氏は、専門用語の造語に「一般むけ語形」の必要性が高まりつつあることを歴史的・計量的な調査をもとに指摘している。小宮千鶴子氏は、「専門連語」という新しい概念を提示し、連語レベルでの専門（用）語研究が大きな可能性を秘めていることを、専門日本語教育とのかかわりから論じている。ソフィー・パルバドー氏は、化学分野の抄録文の日仏比較を通して、文章レベルでの専門（用）語研究の面白さを示してくれている。仲本秀四郎氏は、用語規格の翻訳にあたって生じる言語上の問題を実践的に論じ、この方面での問題解決に専門（用）語研究の深化が必要であることを論じている。

上記５氏のほか、記事原稿をお寄せくださった方々にも、厚く御礼申し上げる。

[1]中井浩「国際情報サービスと言語障害」(『情報管理』22-4、1979)
[2]科学技術庁科学技術政策局調査課『我が国の研究活動の実態に関する調査報告』(1999)
[3]国立国語研究所報告 68『専門語の諸問題』（秀英出版、1981）
[4]石井正彦「専門用語の語構成」(『日本語学』16-2、1997)
[5]柴田武氏の教示による。
[6]Sager,J.C., Dungworth,D. and McDonald, P. F. *English Special Languages.* Wiesbaden, Brandstetter, 1980.
[7]Fluck,H.-R. *Fachsprachen.* Munchen, Francke Verlag, 1976.
[8]専門日本語教育研究会『専門日本語教育研究』1～3